

# 仙巖園における島津家の伝統文化の再現

岩川 拓夫 (仙巖園学芸員)

## 1. 序

仙巖園は、薩摩藩主島津家の別邸として万治元年(1658)に築かれた。島津家歴代に受け継がれ、整備・拡張は続き、琉球を付庸国としていたことから、大陸文化の濃い造形物が時代ごとに作られていることが特徴である。幕末に島津家28代斉彬は、仙巖園の竹林を切り拓いて日本初の近代工業施設群・集成館を建設。仙巖園も藩外から集成館を訪れた視察員をもてなす場所として用いられるようになった。集成館は明治10年(1877)の西南戦争の被害を受けて縮小・閉鎖の道を歩むが、仙巖園はそれ以降も、我が国の皇室をはじめイギリスやロシアの王室など国内外の賓客をもてなす場として用いられた。

昭和24年(1949)、仙巖園は一般開放され、昭和33年(1958)に名勝に指定された(図1)。現在では株式会社島津興業によって管理・運営されている。鹿児島を代表する観光地となっており、集成館の工場施設を再利用するかたちで開館した博物館・



図1 仙巖園の風景

尚古集成館や、斉彬が作成したガラス工芸品・薩摩切子の工場が建ち並んでおり、近年では年間およそ50万人が来場している。また、平成27年(2015)には一帯が「明治日本の産業革命遺産—製鉄・鉄鋼、石炭、造船」の構成資産のひとつとして、世界文化遺産に登録された。

鎌倉時代からの歴史を持ち、古の儀礼、文化を有してきた島津家の別邸であることから、この地を舞台に伝統文化の再現が行われている。本稿では、仙巖園で催される伝統文化をどのようにして再現、実施しているのかを紹介し、同じ文化の再現であってもどのような変化がなされてきたのか検討するものである。

なお今回は、定期的実施しているものにとどめる。不定期では流鏝馬なども実施されているが、継続的な実施によりどのような変化が起こっているかまで述べることはできないため割愛させていただく。

## 2. 自社による儀式・文化の再現—曲水の宴

### (1) 曲水の庭の発見と調査

昭和34年(1959)、園地後背にあった梅林で曲水の庭が発見された。3年がかりの調査の結果、全体像が判明し、元日本造園学会会長上原敬二氏は、規模が大きいこと、原形を完全に留めていることなどから、造園学上きわめて重要な資料であると指摘している。

この曲水の庭は江戸中期に築かれたものと推測さ

れている。それは享保7年（1722）から延享4年（1747）にかけて、21代島津吉貴が仙巖園を隠居の住まいとして暮らし、隣接する江南竹林が元文元年（1736）に琉球王国経由で中国から孟宗竹（江南竹）を取り寄せているからである。江戸でも享保17年（1732）に8代将軍徳川吉宗が曲水の宴を催しているが、この文化が薩摩にも入ってきたのであろう。

故事にならって曲水の庭を活用した曲水の宴を復活させる動きは、平成になってから本格化した。この背景には昭和58年（1983）以降、隣接する歴史資料館・尚古集成館に学芸員が配属されるようになり、本格的に島津家の歴史・文化を調査・研究する状況が整ったことがある。

仙巖園で曲水の宴が催されたという歴史資料は無く、他所の先行事例などをもとに再現する必要に迫られた。そこで発見から30年以上の後、平成3年（1991）に中国に調査団を派遣。故宮や蘭亭に赴き景観や調度品などについて調査する。王羲之たちが曲水の宴を催したことで知られる蘭亭の近くには、仙巖園同様、孟宗竹が植えられており、中国の曲水の庭に近づけるため江南竹林が整備されたのではないかと考えられた。現地では陶器の耳杯が発掘されており、中国の曲水の宴ではこれを盃として用いたものと推測される。

国内では、倉林正次氏の研究を参考にしたほか、宮内庁や毛越寺（岩手県）、城南宮（京都府）、太宰府天満宮（福岡県）の曲水の宴を視察して仙巖園の曲水の宴次第を決定した。宮内庁には曲水の宴で用いた木杯を載せる水鳥型の羽觴と呼ばれる船が伝来している。

## （2）儀式次第

平成4年（1992）3月、仙巖園の曲水の庭において「第一回磯庭園曲水の宴」を開催した（図2）。この年は日中国交回復20周年にあたり、中華人民共和国特命全権大使夫妻の臨席のもと執り行っている。

曲水の宴で出演するのは以下の通りであった。

- ・参宴者 和歌を詠む（8名）



図2 曲水の宴（写真は2019年のもの）

- ・披講者 和歌を披露する（1名）
- ・童児 歌題が記された紙を参宴者に渡し、和歌の記された短冊を参宴者から集める（2名）
- ・白丁 流水に浮かべた盃が止まらないよう導く、参宴者の介添（7名）

上記のうち、参宴者の4名と披講者は県外から招き、童児は地元の小学生、白丁は地元の中学生にそれぞれ役を担ってもらった。県外の参宴者が多かったため、前日のみりハーサルを行っており、童児や白丁が一月前からリハーサルを積み重ねることで、一連の儀式を彼らが牽引できるように準備している。

公家の系譜を継ぐ男性参宴者の衣装は衣冠、それ以外の男性参宴者は直垂とした。女性参宴者は小袖五衣に統一している。これは武家の庭園で催すため、武家の正装を基本としたためであった。童児の水干や白丁のものも含め衣装は県外の伝統装束を取り扱う会社から借用している。

式次第は以下のとおりであった。

- ・正式参拝 仙巖園に隣接する鶴嶺神社に参拝
- ・修祓の儀 曲水の庭を祓う
- ・参宴者入庭 参宴者および披講者が入庭
- ・盃の儀 耳杯で主催者や参宴者に神酒をすすめる
- ・歌題披露 主催者から童児を通じて参宴者に歌題を披露する
- ・芸能 薩摩琵琶と謡曲の披露
- ・流觴曲水 一觴目の羽觴を流す、参宴者は羽

- ・一觴一水 二觴目の羽觴を流し、参宴者は自らのところに届くまでのうちに和歌を詠みあげる
- ・御酒拝戴 羽觴の酒を飲み、盃の上に短冊をのせる
- ・披講 童児が短冊を回収し披講者に渡し、披講者は和歌を披露する

会場となる曲水の宴の周辺は大人数を収容できる場所がない。そこで、隣接する斜面に約700人分の仮設スタンドを用意し、来場者の対応につとめた。また大勢の来場者が盃などを目視することは極めて難しいことが課題もあった。そのため、どのように式次第が催されているのか配布物で提示した上、司会が今何をおこなっているのか解説することによって見えづらくても理解していただけるような工夫を施している。

また、蘭亭の耳杯と宮内庁の羽觴のどちらも利用しているのが特徴のひとつといえる。これは国内と中国を調査した結果、仙巖園は我が国の文化を大切にしつつも中国との関わりも強い場所であるという理由で併用した。

### (3) 時代による変化

曲水の宴は第1回以降、令和2年(2020)まで27回を数える(雨天時の御殿による歌会を含む)。その間にどのような変化があったのか紹介したい。

人員としては白丁を7名から8名に増員することで、ほとんど事前練習ができない参宴者の補佐を強化している。これにより、遠方からの参宴者たちが滞りなく儀式に参加できるようになった。参宴者のうち半数が地元の歌人協会や書道協会から2名ずつ選ばれていたが、幅広い方々に参宴者になっていただくためにこの方式を改めている。公家・武家の系譜を継ぐ参宴者も当初3~4名であったが、これもまた同様の理由で不定になった。

衣装は当初レンタルであったが、第3回の前に仙巖園で購入し、地元の神社や美容室の協力を得て着装の対応をおこなっている。恒例化するにあたり、

仙巖園として所有していた方が費用面としてよいと考えたためであろう。

このほか、薩摩琵琶と謡曲の披露は催されなくなったり、会場に見学者用の仮設スタンドも設置されなくなったりした。後者は費用面が理由として挙げられる。

これらの変化の背景に、仙巖園が儀礼を継続的かつ自力で催すためにおこなっていったことがあるといえよう。儀礼の再現にあたり、費用面を下げつつも曲水の宴そのものの質を低下させないようはかっていった。東日本大震災の直後のため執り行われない年などもあったが、継続的に儀礼を再現することで、運営スタッフに知識や技術の継承を絶えずおこなうことができている。

### (4) 自社による他の伝統行事再現

曲水の宴の再現前後は、島津興業による文化の再現が積極的に行われてきた。その基礎資料となったのが『炉辺南国記』である。30代島津忠重の随筆であるが、明治時代まで続いた島津の伝統文化を書き残している。忠重は少年期まで仙巖園で暮らしていたことから、この書物をもとに儀式・文化を進めることができた。

平成3年(1991)4月には五月幟を再現。鯉のぼりではなく、丸十紋2本や五七桐紋2本、昇り龍、降り龍が描かれた旗1本ずつおよび吹き流しの合計7本が飾られる(図3)。これは『炉辺南国記』の記述と、尚古集成館に残っていた幟とその竿をもとに再現している。随筆には嫡男は7本でそれ以外の



図3 五月幟

男子が5本であったと記されているが、敷地などの問題などから嫡男の分だけを再現した。

同年8月には七夕飾りを再現（図4）。これもまた『炬辺南国記』に記されていたように江南竹林から竹2本切り出して飾り付けている。随筆には竹の根元に水や果物を供え、枝には島津家の子どもたちが漢字や和歌などをしたための短冊などを飾ったとある。大まかな記載であるため、供物や飾り付けは再現されてからその内容を変化させている。例えば供物として星形に切った色紙を水に浮かべたりしていたが、最近では神事の際の供物と同様にしている。鹿児島で広く知られる戦国時代の島津忠良（日新）が詠んだ「日新公いろは歌」を短冊にしたためていた時期もあったが、明治時代も同様の和歌をしたためたように誤解される恐れがあることなどから近年はあえて字を書かずに飾っている。飾り付けは随筆によると島津家の子どもたちが行っていたが、それに代わって仙巖園のスタッフが飾りつけしている。

平成2年（1990）11月に御殿の一般公開を開始している。御殿のガイドスタッフの案内で邸宅内を観覧する形式を平成30年（2018）まで続けていたが、この案内内容は主として島津忠重の少年期を時代設定していた。この時期は仙巖園が島津家の本邸として用いられており、かつ『炬辺南国記』による往時の暮らしぶりが残っていることから詳しく説明をすることができるからである。

このように平成初めは『炬辺南国記』の記載や庭園の遺構を活用した文化の再現にあたった。そして



図4 仙巖園七夕飾り

いずれも自社で運営していることが特徴である。資料内容を根幹としながら、微調整することで行事の長期継続を図ってきた。

### 3. 外部機関の協力による儀式・文化の再現

#### (1) 草鹿式

島津家初代忠久は源頼朝の落胤という伝承があり、『寛永重修諸家譜』にもその説話が記されている。江戸時代後期、島津家25代重豪は鎌倉にある源頼朝の墓を修繕し、その墓は平成に入るまで島津家が所有していた。

頼朝没後800年にあたる平成11年（1999）、上記の歴史を背景に、鎌倉市民から島津家歴代を祀っている鶴嶺神社（仙巖園隣接）に源頼朝墓の縮小複製が建立された。これにあわせて、仙巖園内で源頼朝にゆかりの深い歩射儀礼・草鹿式の演武が披露されたのである（図5）。

草鹿式は、頼朝の弓馬術礼法指南だった小笠原長清が始めた弓術訓練がもとになっている。前弓と後弓の5人2組が革で作られた鹿に矢を放ち、命中した矢の数を競う。小笠原流宗家や同門会が烏帽子をかぶり、直垂に身を包んで催している。前日に県内外から小笠原流同門会の参加者が会場設営をおこない、リハーサルを実施。当日、鶴嶺神社に正式参拝した後、園内で本番を迎える。的やその勝敗の決し方などはただ見ているだけでは理解しがたいことから、進行役が見学者向けに解説をおこなっている。



図5 草鹿式

この儀礼は、平成11年以降も毎年催されるようになった。この運営にあたり、仙巖園は会場提供、来場者および広報対応と日記役（儀礼の再現上の役割としては台詞を1言述べる）として1名参加することのみにとどまっている。小笠原流弓馬術礼法に則って催される儀礼であり、仙巖園としてはその専門的知識を有していないためである。

## （2）鉄炮の演武と鷹狩

ポルトガル人が種子島に火縄銃をもたらし、島津家15代貴久は種子島時堯とともにその流通に深く関与し、積極的に戦場で活用した。このことから種子島には以前から鉄炮文化の発信、継承のため鉄炮隊が結成されていたが、海を隔てた、地元で「本土」と呼ばれる薩摩半島・大隅半島には長く鉄炮隊がなかった。しかし、平成27年（2015）、薩摩半島西部に位置する日置市で、市政10周年にあわせて市民有志により薩摩日置鉄炮隊が結成される。これを受けて仙巖園ではこの薩摩日置鉄炮隊を招いて火縄銃の演武を実施する運びとなった（図6）。

平成28年（2016）以降毎年演武を開催しているが、当初、会場となったのは隣接する鶴嶺神社の境内である。火縄銃の演武にあたり警察の許可が必要となるが、仙巖園は入場料を支払って観覧する場であり、火縄銃の演武を営利目的として用いていると思われたため、許可がおりなかった。しかし、境内の敷地面積があまり広くなく、安全性の問題が挙がるようになる。そこで薩摩日置鉄炮隊と仙巖園では、安全性に加えて慶応2年（1866）にイギリス公使パーク



図6 薩摩日置鉄炮隊による火縄銃の演武

スが仙巖園を訪れた際、薩摩藩が大砲や小銃の演習を披露しており、幕末の賓客のおもてなしを再現するために仙巖園内で実施するよう改めて警察に相談し、平成30年（2018）より仙巖園内で演武の披露が行われるようになった。

火縄銃の演武は鶴瓶撃ちや一齐射撃のように全国的に演武の演目として挙げられるもののほか、戦国島津が実際におこなったという「抜き撃ち（繰り抜き）」の再現などもしており、島津家と鉄炮文化とのつながりを紹介する内容になっている。薩摩日置鉄炮隊は甲冑を身にまとい、近代以前に作成された火縄銃を用いて演武の披露をしている。

鷹狩の披露は平成31年（2019）から実施している（図7）。戦国時代に島津家が頻繁に鷹狩をおこない、鷹を畿内の権力者に贈っていたこと、幕末にも斉彬たちが鷹の絵を描いていることなどから武家の狩猟・鷹狩を披露する計画を立てた。

実施にあたり、鹿児島市の北隣・始良市に在住する吉田流放鷹道古技保存会の麓政司氏の協力を得た。戦国時代の島津家家臣・上井覚兼によると、島津家の鷹狩は諏訪流であったようであるが、宮内庁の放鷹術を継承していることから、往時の技術を紹介するため、麓氏に依頼した。

演目としては鷹の渡りと呼ばれる実際に鷹の調練でおこなうものを披露している。また、見学者の手に鷹を据えて鷹匠の合図で飛ぶ演目もおこなうことで、往時の藩主の気分を見学者に体験していただくこともおこなった。鷹匠の衣装は普段の調練の衣服



図7 鷹狩

を着ておこなっている。

火縄銃の演武と鷹狩のいずれも、仙巖園は会場提供、来場者と広報の対応および安全柵を設置する対応である。草鹿式以降、その高い技術と専門性の儀礼・文化を定期的に催すようになったが、それらはいずれも儀礼や文化、技術の継承者の協力を得ておこなうものである。それは高い技術性の披露を通じて、見学者に伝統文化の専門性を感じ取っていただくことを目的としているためである。

2000年前後になると、平成の初期のように随筆『炉辺南国記』の記載や、文化財そのものを基礎とした文化にとどまらない儀礼、文化の再現を行うようになった。草鹿式、火縄銃の演武、鷹狩はいずれも仙巖園でかつて行われてきたこと、という側面よりも島津家がかつて行ってきていたことの再現、という意味合いが強い。それは仙巖園が島津家の歴史、文化の発信地という自己認識をもってその再現の意欲を強く抱いたからといえよう。

#### 4. 結

仙巖園は令和2年(2020)の文化庁補助事業「Living History」で、蹴鞠と犬追物、鷹狩の再現に向けて進める事業の採択を受けた。蹴鞠については、島津家18代家久が非常に好んでいたこと、戦国期から幕末にかけて島津家歴代が飛鳥井家から蹴鞠の免許状を得ていたことが背景にある。鎌倉時代の武士のたしなみである犬追物は江戸時代以降、島津家のみが伝承し、天皇や将軍の前でも披露した。しかし犬追物自体の再現は、動物愛護の観点で不可能であり、実際に島津家で用いていた犬射墓目を再現してそれを放った音を聞くことで「再現の体感」をしていただくことを考えている。そして鷹狩はすでに実施しているものの、鷹匠の衣装などを往時の姿にすることで、より武家の文化として入場者に理解していただけるものになると思われる。

景観の美しい庭園を持つ仙巖園であるが、それだけでは入場者のリピーターの確保は難しい。島津家の儀礼、文化を再現、発信することで、往時の暮ら

しぶりを堪能する空間として広く認識され、より多くの人に求められる存在になるのであろう。

近年では儀礼、文化の再現のみならず島津家の歴史、文化と親和性の高い漫画やアニメ、ゲーム作品の協力を得た展示も増加させている。現代文化と伝統文化、その両方を発信することで幅広い世代、歴史や伝統に興味を持っていない人々にも入園意欲を持っていただけるだろう。鎌倉時代から800年続く島津家は常にゆるやかに変化しながら混乱の時代を乗り越えてきた。鎌倉から現代まで、鹿児島と島津家が有してきた文化を魅力的に伝えることを今後も努めていきたい。

#### 【参考文献】

- 1) 田村省三 1993「<報告>仙巖園曲水の宴」『尚古集成館紀要 6号』
- 2) 島津忠重 1957『炉辺南国記』鹿児島史談会